

木簡である。春宮坊関係の木簡は、第三二次調査において検出した、この溝の上流にあたるSD四九五一、及びこれに合流する二条大路北側溝SD一二五〇、宮内の排水のための南北溝SD三四一〇などから奈良時代後半のものが出土している〔平城宮木簡〕三。また、第三二次調査区の北方にあたる第一〇四次調査でも、SD四九五一の小子門を越えた宮内の上流部にあたると思われる南北溝SD三三三六から、やはり奈良時代後半のものと考えられる春宮坊関係木簡が出土している〔平城宮発掘調査出土木簡概報〕一二。さらにその上流、造酒司推定地の南を調査した第二五九次調査でも、宮内道路南側溝SD一一六〇〇から同様の奈良時代後半のものが出土している（本誌第一八号）。今回の第二八—三三三次調査出土の(1)は、年代を考える手がかりがなく、以前に出土したものと一連のものか否かは確定できない。どこで廃棄されたものであるかも検討を要する。

(2)に見える少録は、八省または省レベルの官司の第四等官であるが、記載されている正六位上の位階は八省少録の相当位である正八位上より高い。(3)は玉のためし（見本）の付札である。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九九八—Ⅲ』（一九九八年）

同『平城宮発掘調査出土木簡概報』三四（一九九八年）

（古尾谷知浩）

平城京左京二条二坊十一坪出土の墨書土器

平城京左京二条二坊十一坪の調査（奈文研第二八—一六次。調査位置は二五頁参照）で、「花寺」と書かれた墨書土器が出土した。墨書は、奈良時代中頃の建物の柱採取穴から出土した須恵器杯の底部に書かれている。

十一坪は二条条間路を挟んで阿弥陀浄土院推定地の南に隣接し、今回の墨書土器も法華（花）寺との関連を想起させる。ただ、十一坪には奈良時代後半に正殿・東西脇殿・後殿からなる大規模な施設が置かれ、回廊に囲まれた特異な建物配置をとる南側の十坪と一体として利用されたと考えられている。この十・十一坪はまた平城宮・京で緑釉瓦が最も濃密に分布する地域でもある。



同じ坪内の別の調査では木簡も出土しており（本誌平城京跡(1)二・三、今回の墨書土器ともども、その性格をめぐる議論に一石を投じることになる。

（渡辺晃宏）